

伊勢の中世

第 3 0 9 号
伊勢中世史研究会
令和6年3月1日発行

事務局：〒515-2321 三重県松阪市嬉野中川町 1524-121 竹田憲治方

メール takeda@ztv.ne.jp ホームページ <http://mietyusei.bakufu.org/>

有滝の御頭神事—「打ち祭り」の内容を中心に—

本稿は令和6年1月14日（日）に行われた「有滝の御頭神事（令和5年度）」について、筆者が見学および聞き取りした神事の内容をまとめたものである。神事の概要は過去に『伊勢の中世第266号』でレポートしたので参照されたい。筆者は八玉神社川邊宮司の御計らいにより、これまで一部の関係者しか参加することが許されなかった神事の最終盤に行われる「打ち祭り」を見学することができた。これは、今後の継承に向けて記録として残すべきとの川邊宮司の判断に基づく。今回は、その貴重な体験を中心にレポートしたい。

1. 神事の変容

当該神事は、コロナ禍中の令和2年度は中止、令和3・4年度はへーバイのみであった。平成31年度の取材時には、世帯数が420世帯を数えていたが、今回確認すると400世帯を割り込んでおり、伊勢市であっても海浜部に位置する集落では人口減少が見受けられる。そのため、神事に関わる担い手の確保や負担軽減が喫緊の課題となっており、コロナが5類感染症となって初めての本神事では、その内容が下表のとおり変更された。

	コロナ以前	令和5年度
御頭の飾り場所	八玉神社境内獅子殿	祭礼クラブ（有滝公民館横）
拝殿前	五起し	五起し
鳥居前	七起し、へーバイ	七起し、へーバイ
タコ投げ	各所巡行後の宿にて	鳥居前で実施（前倒し）
親元参拝	有り	有り
本覚寺参拝	有り	有り
大雲寺参拝	有り	有り
各組頭（12組）訪問	有り	有り
文太夫辻	舞、へーバイ	へーバイのみ
広山辻	舞、へーバイ	へーバイのみ
社護神 「打ち祭り」	有り	有り

特に、各辻での祭事については、当初何もしないことも検討されたとのことであったが、集落を祓い清める神事の性質を自治会で議論し、実施されることになったという。これにより、舞手の負担軽減と神事の時間短縮が図られた。

2. 神事当日の関係者の動き

当該神事について、八玉神社前でのへーバイ後の関係者の動きは複雑で全てを理解するのは容易ではない。大きくは3つの動きに分れる。

(一) 自治会役員や有滝町内のお盆等の祭礼全般を保存する「祭礼保存会」の方々に、先端に鉾を模した木製品を装着した笹竹および太鼓を移動させる。笹竹を「福竹」と呼称し、舞を行う場所の鬼門（北東）に位置する場所に、オカシラサンに先んじて設置される。場所は八玉神社、伊勢湾漁協有滝支所前（文太夫辻に対応）、祭礼クラブ前（広山辻に対応）、社護神（町民は「サグジ」と呼称）の鳥居である。

(二) 神楽師と太刀持ちで八玉神社での舞の終了後はいったん出発地点の祭礼クラブに戻り、文太夫辻でのへーバイの時刻に合わせて同辻へ移動する。広山辻においても同じである。

(三) 有滝町を構成する12組の内、6組の組頭（奇数と偶数で隔年で神事を担当）で、親元や本覚寺、大雲寺および町内の組頭宅へオカシラサンを担いで巡る。組頭宅では、各組からの御供である「フクメモノ」を受ける。巡行では山ノ神の前は通らないなど細かな決まりみられた。

3. 「打ち祭り」

広山辻でのへーバイが終わると、太鼓が先行して神楽師や組頭が一緒になって残る1、2番組の組頭宅へ向かい「フクメモノ」を受ける。その後、「釜屋前」と呼ばれる地点に来ると、オカシラサンが組頭から神楽師に引き継がれる。この場所は集落の中でも分水嶺になっている地点とのことであった。有滝漁港内にある社護神に、神楽師4名、太刀持ち、宮司が向かう。これより先は無言の行で、祭礼クラブへ帰着するまで、一切話をすることはなく、神楽師の代表による無言の指示で進行される。

途中、漁港の堤防で先行した太鼓が待っているが、「打ち祭り」には参加しない。社護神に着くと遠くで太鼓が打たれているのが聞こえる状況である。

社護神に一行が到着すると、鳥居に結わえられた福竹をほどき、神楽師の代表が太刀持ちから太刀を受取り福竹の中程を切る所作をし、福竹を海に投げ入れる。その後、オカシラサンを東向き（社護神に向かって右側に頭）に寝かせ、オカシラサンの前に立ち、神楽師の代表が一礼の後、辻などで行ったへーバイと同じ所作を行う。

へーバイは、太刀を右手に持ち、右から左、左から右へ太刀を水平に切った後右側で垂直に立て、左から右へ縦方向に七回切る所作を行う。前述の同じ動作を行い最後の縦方向へ切る所作を五回、三回と回数を変え、最後にもう一度水平方向に切って、一礼する。

へーバイを終えると、神楽師の代表が太刀を持ち、漁港内を巡る。この時、太刀は横向きに寝かせ、刃先を海側に向ける。他の関係者も代表者に着いて巡る。最後にもう一度へーバイを行い、「打ち祭り」は終了となる。

帰路は往路とは異なる決まった道を通る。本来は太鼓が先行してオカシラサンが戻ることを町民に知らせ、オカシラサンに遭遇しないように知らせるとのことであった。祭礼ク

ラブに近づくと神楽師から太刀持ちにオカシラサンが渡された。本来は、「打ち祭り」前後の移動は太刀持ちがオカシラサンを担ぐが、負担も大きいための配慮とのことであった。

4. まとめ

当該神事について、今後の継承への危機感から記録を残しておきたいという考えから、これまで秘儀として有滝町民でもごく限られた関係者しか参加したことがなかった神事最後の「打ち祭り」を拝見する僥倖を得た。拙い文章ではあるが、有滝の御頭神事の継承に繋がれば望外の喜びである。なお、八玉神社では自治会や神楽師と相談し、数年前から「獅子みくじ」としてオカシラサンの紙垂に「おみくじ」としての要素を取り入れ、今まで以上に町民の神事への関心を高めようと新たな取組もなされている。「打ち祭り」の行為自体は短いものであったが、御頭神事の本質的な意味が集落の除災であると考えたとき、当該神事の「打ち祭り」にはその要素が十二分に備わっていると感じた。

本報告の作製にあたり川邊宮司、有滝自治会ならびに自治会長、神楽師および有滝町民の方々にご協力をいただきました。末筆ながら記して深謝申し上げます。

(味噌井 拓志)

<参考文献>

堀田吉雄 1969 「有滝の御頭神事」『伊勢民俗八ノ二巻』伊勢民俗学会

橋爪芳蔵 1995 『ふるさと有滝の今昔物語』

伊勢市 2009 「2 御頭神事」 『伊勢市史 民俗編』



有滝の御頭神事 関連地図



獅子みくじ





タコ投げ



文太夫辻でのへーバイ



伊勢湾漁協有滝支所前に置かれた福竹



広山辻でのへーバイ



社護神に到着し鳥居に着けられた福竹を外す



打ち祭り



太刀を持ち漁港を巡る関係者